

## 研究授業「音楽通論Ⅱ」の実施

柴田玲子\*

### The Open Class “Musical Theory II”

Reiko Shibata

#### 1. 研究授業の日程

研究授業および検討会は次の日程で行われた。

〈研究授業〉

日 時 2006年12月4日（月）1校時 9時～10時30分

場 所 F102講義室

〈検討会〉

日 時 2006年12月4日（月）2校時 10時40分～12時10分

場 所 F205研究室

#### 2. 本講義の目標

音楽科の学生として、演奏するために最低限必要なこと、それは「楽譜を正しく理解できる能力」である。前期開講の音楽通論Ⅰでは、五線・音部記号・音名から始めて音程・調号・音階へと楽典の基礎を扱うと共に「正しい記譜ができること」を最重点に授業を進めた。この音楽通論Ⅱでは楽典の続きとして前期の内容を定着させることに加えて、調の相互関係・移調・和音を中心に「楽譜から読み取れるものを増やして表現につなげること」を目標としたい。

### 3. 他の専門科目（柴田担当分）との関連について

音楽通論Ⅰ	前述の通り、この音楽通論Ⅱを履修するための必要条件。
和声学	前期に履修済みの学生が多い。和音の簡単な構造のみを先行して学習。
作曲法A	同時に開講中。内容は対位法なのでこの通論Ⅱの「非和声音」を不協和音程として実践・補強する形となる。
作曲法B	2年生前期に開講。楽式論が中心となるため、和音のはたらきや調の判定についての知識が必要となる。
音楽史B	前期に履修済みの学生が多い。本来通論Ⅱで扱うこともできる日本音楽のリズム、音階等の内容は、音楽史の方で取り上げた。

### 4. 受講生の状態と対応

音楽科1年生7名。選択科目ではあるが例年はほとんどの学生が履修する。本年は後期になって他学科で時間割変更があり音楽療法の必修科目と同じ時間になってしまったために、受講生は非常に少ない。7名の中には入学時に楽典については白紙状態であった者から、高校音楽科で一通り完了していた者までいてレベルの差がはなはだしい。

初心者向けのゆっくりしたペースで講義を進めているつもりであるが、個人差に対応するためにほとんど毎回ワークシートを作って使用している。理解が遅れがちな学生には最低限クリアすべき作業を、余裕をもって解決できる学生にはある程度の負荷を与えて各自が毎時間何らかの達成感を味わうことができるように配慮しているつもりである。

### 5. これまでの授業の進行状況と本時の内容

#### 第1回（9月25日）

音楽通論Ⅰの復習。通論Ⅰと通論Ⅱを合わせて「楽典」が完成するため非常に関連が深く、基礎知識を確実なものにしておく必要がある。和音を考える上では3度音程を瞬間的に判断できることが望ましいが、これはソルフェージュ能力の問題であるため理想的な状態はむずかしい。各調の構成音＝調号の理解は和音の所属調を考える上でも、また、移調をする際にも欠かせないので、五度円を書くことと共

に、時間をかけて確認した。新しい内容として「三和音の構造」を説明。

#### 第2回（10月2日）

調号の復習という意図もあってここで「調の近親関係」。共通の固有音を多く持つ近親調は楽曲の中に共存しており、一つの音を考えても場面によって機能が異なることに気づかせる。狭義の近親調だけでなく和声的近親調についても説明。

「三和音を含む調」。一つの和音を共有する調の考え方について、上記近親調の理論とも合わせて説明。

#### 第3回（10月16日）

「七の和音の構造」。長七・短七・属七・減七といった各種七の和音が音階のどの音の上に行けるかを調べさせる。三和音と合わせて「転回」について説明。第一転回、第二転回、～という言い方と、六の和音、四六の和音、～という言い方の両方を自由に使えることを目指す。

#### 第4回（10月23日）

「移調」。前期に調号から調号への書き換え（移調）・その際の臨時記号の扱い方については学習済みであるが、まず復習から入って移調の概念を確認。通論Ⅱの新しい内容としては、臨時記号のみで書かれた楽曲を異なる調へ調号で、またはその逆の書き換えができるように手順を練習。（ここでもソルフェージュ能力が十分備わっていれば手順は必要ないが）機械的に処理する方法で指導。

#### 第5回（10月30日）

移調の練習。種々のパターンの移調の例を挙げ、目的に合わせて移調するとはどういうことかを体験させる。したがってワークシートの作業が中心となる。

#### 第6回（11月6日）

「属七の和音」。第3回の授業では七の和音全般について扱い、ワークシート等で定着を目指したが、今回はその中でも特に重要な属七の和音だけを取り出して学習。

同主調間で共通であることや他調の和声の中に借用されやすいことなども体験的に感じてほしいので、その点についてはこれからの授業に取り入れる。

#### 第7回（11月13日）

「楽語」。英和辞典を使ってイタリア語の楽語と似た綴り・意味の言葉を探させる。ヨーロッパの言語はラテン語の語源が共通であるものが多く、既知の英単語から楽

語の意味を類推できるものが少なくない。辞書を引きながら楽語への興味が増し、印象に残った語はその周辺の語も合わせ考えることができれば記憶にもつながることを意図してこのような取り組みをさせている。

前回の属七を復習する意味もあって「属七の和音の解決」。前期の和声学では三和音しか扱っていないので、和音の進行法は全員がほぼ初めて。限定進行音を進行させることによって長三和音あるいは短三和音に導く練習。

#### 第8回（11月20日）

「属七の和音の解決」を鍵盤上で。転回すると種々のパターンになることを示した後、基本形ですべての調の和音進行例を書いたものを配布、次回までにどの音を根音に指定しても弾くことができるようにすることを課題とする。

「非和声音の種類と使われ方」。メロディーには和声内在していることがほとんどである。そう考えると非和声音ぬきにしてなめらかな旋律は存在し得ない。簡単な童謡の中にも非和声音が続々と登場することを知ることにより、今まで意識したことがなかった旋律の成り立ちに興味を持つことを目指す。

#### 第9回（11月27日）

「楽語」。前々回から授業であるいは各自取り組んできた英語との関係も含めて今回でまとめる。発想を表す語を中心にある程度興味を持てたようである。

「属七の和音の解決」。練習成果の発表の後、減七の和音の構造と働きを確認。短調のⅦの七の和音としてしか存在できないこと、解決の方法、ただ一つの調に所属することなど。両方とも次の和音を要求する力が非常に強く、音楽が前に進むエネルギー源となっていることに気づかせる。鍵盤上で減七の解決を練習。

実際に楽曲の楽譜から主に属七の和音を探し、解決の状態、その部分の調を調べさせる。三和音に進まない場合によくある経過属七についても解説を加えた。

（使用した曲；コンコーネ50中声用 3番→1番→2番）

#### 第10回（12月4日 本時）

「減七の和音の特殊性」。前回に続き、楽曲中から属七と減七を探させる。（使用する曲；ショパン ノクターンOp. 9-2 冒頭部12小節）前回より少しだけ難度が高く、適度に属七、減七を含み、誰もが知っている曲としてこれを使用する。今回はそこで用いられた減七に注目して異名同音変換の可能性を体験し、響きを同じくする減七が五度円のどこに分布するかを調べさせる。

授業計画案

題 目	減七の和音の特殊性について
目 標	<p>楽曲中の和声の流れに注目して楽譜を読むことができる。 異名同音変換による和音機能の広がりを理解し、転調の可能性が多様であることを実感する。</p>
9 : 0 0	<p>楽譜（ショパン ノクターン）を配布し、各小節の和音を簡単にするとどんな和音となるのか考えさせる。 配布①・②</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>和声要約したものを見て、解説を加える。</p>
9 : 2 5	<p>ショパンの最初に出てくる減七の和音に注目して異名同音変換の可能性に気づかせ、減七の構造上の特徴を再認識させる。 配布③</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>ワークシートで鍵盤図上の減七はどのように解釈できるかを考え、グループ1の作業を全員で一緒に進める。</p>
9 : 3 5	<p>グループ2と3の作業を個々に進めさせる。</p> <p style="text-align: right;">ひとりひとりの作業を見て、問題点が解決できるように援助する。遅れている学生には1の作業を確認させ、進んだ学生には次の課題を与える。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: right;">少なくともグループ2の作業を終えたら</p>
1 0 : 0 0	<p>結果を五度円に記入させる。 配布④</p> <p>一定の位置だけを考えた場合、音符にすると基本形にも転回形にも書くことができることを、実音と譜例から確認する。</p>
1 0 : 2 0	<p>増三和音も同様に考えることができることを簡単に説明。</p> <p>練習問題を配布し、次回までの課題とする。 配布⑤</p>

配布資料・ワークシート

① ショパン ノクターンop.9-2 冒頭部12小節の楽譜

(全音楽譜出版社 ショパン ノクターン集より)

② ノクターン冒頭部8小節について授業者が和声要約した楽譜

③ ワークシート 減七の和音(後掲)

すべての減七を鍵盤上でとらえた時、実際に響く音は3種類しかないので、鍵盤図を3面示してグループ1~3とし、3種類の減七をマークした。そこから五線譜上に和音を書き取る作業。「転回形でなく、縦に4つ一直線上に重なる基本形」で書くためには異名同音変換を考えなければならない。

グループ1の作業を例にとって解答への手順を示す。

2オクターブの鍵盤図、dの音を含む減七に用いる鍵盤すべてに印がついている。左端から4個の印を同時に弾くとどんな和音として書くことができるか。

そしてそれは何調のⅦの七か。〈d・f・a・ces es moll〉

〈cisis・eis・gis・h dis moll〉

左から2~5番目の4音の場合はどうか。〈eis・gis・h・d fis moll〉

このようにして導き出された5個の調名を五度円で探すと直角に交わる対角線上に位置していることに気付く。

④ 減七の利用(後掲)

ツェルニー100番より第27番の楽譜(全音楽譜出版社)をもとにした資料。

5~12小節の部分を和声要約して減七と属七に注目させる。それぞれが調の決定に大きな役割を持っていて、特に減七は構成音の一個でも異名同音に置き換えるだけで全く違う調を要求することを確認。その実例として授業者が変えたツェルニーを用いる。減七と分析した和音の響きを保ったまま異なる調に進めたもので、何の異和感もなく曲は進行するが、C durに戻る箇所ではA durやEs durなどのテーマに入ってしまう。

- ⑤ 練習問題。減七の和音について構造・転回・所属調・異名同音変換等、いろいろな角度から作業を通して理解を深めるためのもの。

## 6. 今後の授業の予定

### 第11回（12月11日）

「移調楽器」。実音と記譜音が異なる楽器を広い範囲で紹介し、そのうちで管弦楽に定席を持つクラリネットとホルンについて読譜の練習をする。あわせて、移調の総合的な練習問題に取り組ませる。

### 第12回（12月18日）

和音・基礎的な和声について総合的にまとめる。コードネームとの関係についても扱う予定。

### 第13回（1月15日）

定期試験の予備試験。各自の問題点を発見するために同一範囲で。

### 第14回（1月22日）

答案の返却。解答の説明。

### 第15回（期日未定）

定期試験。

## 7. 研究授業を終えて

音楽科専門科目の中でも一番の基礎と言える音楽通論では、前期の通論Ⅰを定着させると共に通論Ⅱで「和音・移調」という二つの新しい内容に取り組むことにより「楽典」を完成する予定になっている。しかし個人差が大きく、なかなか基礎的内容が身に付かない学生を待つ意味もあって、今年の授業は、行きつ戻りつ、前期の音程・音階・記譜と和音や移調の総合的内容で進めることにしてみた。

本時は和音の理論の中でクライマックスとも言える減七を扱った。これまで9回の授業で三和音から属七へとゆるやかにすすめてきたので学生全員が話についてくることができはずだと思ってワークシートを配布したが、やはり理解度の低い学生にはハードだったようである。問題を解くことに重点を置くのではなく、楽曲の中から楽典のおもしろさを

発見してほしいので日頃から配布する楽譜は多い。有名な曲の一部を引用したり授業者が説明のために作曲・編曲したものをうい、それを学生が後で自分で弾いてみたくなるような働きかけをしてフィードバックをねらっている。意欲的な学生は授業で扱わなかった曲からも似た例を発見して質問に来るので、『楽譜の見方』という点で少しは変わりつつあるのではないかと思われる。

#### (1) 目標設定について

机上の理論ではなく実際の響きとして、少なくとも鍵盤上の実感を持って和音・和声を、という考え方でむしろソルフェージュ的と言えるような目標を設定した。学生の読譜能力や演奏技術の問題から理想的にはいかないことが予想されたが、思っていたより良い反応が得られたので、今後、授業のスピードや時間配分を工夫すればより効果的な定着が望めるはずである。

#### (2) 授業の流れと学生の理解度について

ワークシートではそれぞれの作業を3段階程度ずつ設定、その第1段階だけを終われば次へ進むことができるように作ってある。(段階の2と3は次回までの宿題、といっても余裕のある学生は時間中に完成する。今回の作業は全く手順が同じでスピードだけの問題であったが、普段の授業のワークシートは段階1→2→3とレベルが上がり、第3段階の作業・問題は音楽高校出身者でも安易には記入できない。既習の内容を大学で再び習うということの中に自分なりの意義・問題点を見出すきっかけとしてほしいのでこの方法をとっている。) 進度の遅い学生が基礎の部分にゆっくりと取り組み手順を飲み込んだところで次に進むように計画してあるのでほぼ予定通りの流れで進んだ。ただ増三和音に言及したところで半数程度の学生が「同じ」ということが理解できていない反応を見せたので、次回の授業で説明を加えながら本時の内容の復習をする必要がある。

減七の和音の特殊性、異名同音の変換で響きはそのままで他の調の和音になってしまうことについて、さまざまな楽典の本で扱われているが、学生には理論としてしか受け入れられていない場合が多い。一方、電子オルガン専攻の学生は同じ響きの和音でもコードネームで処理しすぎて和音の機能に気づかない。理解度といっても何を理解させたいかという原点に戻って考える必要があるのではないかと思う。「理解」というよりも、鍵盤上でつかんだ減七のオールマイティーな性格に驚き、使われ方を実感し、面白いと感じてくれることを望みたい。



おわりに

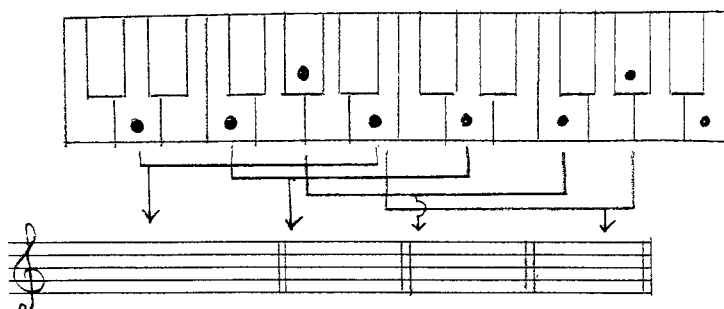
研究授業・検討会と音楽科の先生方には貴重なご意見をいただき、これからの授業を考えるために大変参考になった。同時に学生の現状を見ていただいたことにも大きな意味があったと思う。本学音楽科は実技の指導で教員と学生の1対1のふれあいがあるばかりでなく、研究室制度によって実技担当以外の教員とも1対1でかかわり、一方では研究室の枠を越えて他の教員とも話をする機会が多い。すべての専任教員ですべての学生を育てるという考え方になっているので、どの先生も個々の学生のことをよくご存知である。そういう先生方に学生の予想通りの、あるいは新発見の一面がお見せできたのではなかっただろうか。おそらく本日の授業で気づかれた学生の問題点を個人指導の場でそれとなくご指導いただけるのではないかと期待している。

研究分野が違っていても互いに授業を公開し意見を出し合うことは非常に有意義であると思う。今回は授業をする立場だったが、学生にも授業者にも、通常通りの授業を進めながら程よい緊張感があり、それが良い効果につながるのである。次の機会には学生の中に入って他の先生の講義に参加し、授業のあり方を研究していきたいと思う。

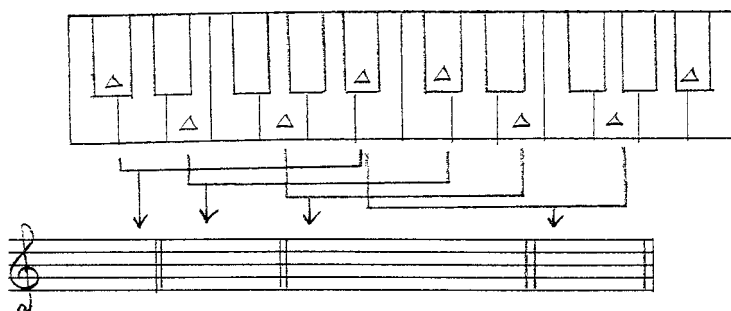
## 減七の和音

「        」で示した和音をすべて転回していない和音の形で五線に書き、それぞれが何調のⅦの七であるか、その調名を記入しなさい。

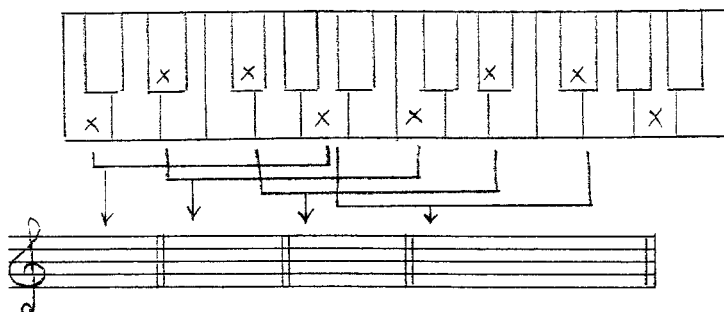
グループ1



グループ2

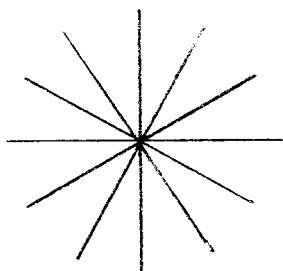
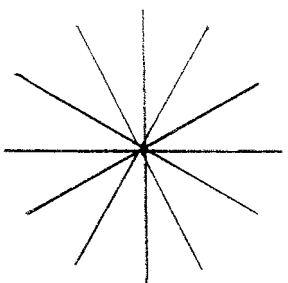
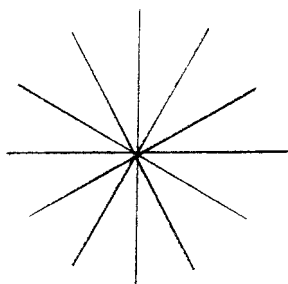


グループ3



mollの五度円を調名で3個作り、左のグループ毎に出てきた調を丸で囲みなさい。

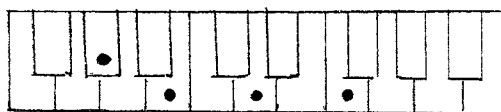
$\alpha$  :



## 減七の和音のまとめ

dur自然長音階・moll和声短音階それぞれの音階固有音上に七の和音を作った時、mollの導音上にだけ短3度を3個重ねた形の減七ができる。そこにしかできない、ということは、譜面上に減七を書けば調が確定する。

ところが鍵盤上ではそうではない。一つの鍵盤は二つ以上の音名を持っている。hisとc、cisとdesのように異名同音に置き換えると異なる調の減七として成立してしまう。



上の鍵盤図の4音を弾いたとしても聞いただけで転回の状態は判断できない。基本形であり、同時に第一、第二、第三転回形でもある。左の作業で調べたように同時に5個の調に所属できるのである。

実際に使ってみると短三和音ばかりでなく、長三和音に進めることもできる。たとえば、

$gis \cdot h \cdot d \cdot f \rightarrow a \cdot c \cdot e$ が普通であるが、

$\rightarrow a \cdot cis \cdot e$ も可能。

それを合わせると所属調は倍の10個になる。

可能性の広い減七の和音を利用して多くの作曲家たちが手軽に近親調以外の調に転調している。転調までいなくても和声的に色合いをつける場合にも使われることがある。

各自、今取り組んでいる曲の楽譜を見て、どこに減七が使われているか探してみよう。

## 減七の利用

27. Moderato.

ツェルニー100番練習曲（全音楽譜出版社）より

上の曲では中間部に減七が分かりやすい形で使われています。

5小節めから12小節までの和声進行を要約すると以下ようになります。

ア ↓  
イ ↓  
ウ ↓

減七→解決   属七→解決   減七→   属七→   減七→   属七→   属七

d moll   C dur   G dur   C dur

全体が減七と属七を解決するだけに終始しています。同形反復で3回繰り返しますが3回目は少し拡大しています。

ア・イ・ウはそれぞれグループ2・1・3の鍵盤図にある形です。アは短三和音に解決するので、その2小節間 d mollですが、イ・ウは短三和音の代わりに長三和音に解決してそれぞれ、C dur・G durを導く形になっています。

ア・イ・ウとも減七ですから異名同音で他の調へも進められるはずですね。→

5～13小節の部分を3通りに変えてみました。要約譜のアとイに該当する5・7小節冒頭の和音は鍵盤上では全く同じです。13小節めでどんな調になってしまうのでしょうか。

The image displays six systems of handwritten musical notation, each consisting of a treble and bass clef staff. The notation is a piano accompaniment for a piece, showing various chord progressions and melodic lines. The systems are labeled with chords in the bass staff: h:, A:, E:; #8, A:; f:, Es:; Es:; as:, Ges:, Des:; Ges:.

高松大学紀要  
第 49 号

平成20年 2月25日 印刷  
平成20年 2月28日 発行

編集発行 高 松 大 学  
高 松 短 期 大 学  
〒761-0194 高松市春日町960番地  
TEL (087) 841 - 3255  
FAX (087) 841 - 3064

印 刷 株式会社 美巧社  
高松市多賀町 1 - 8 - 10  
TEL (087) 833 - 5811